

# 大阪・津堂遺跡<sup>つどう</sup>

- 1 所在地 大阪府藤井寺市津堂四丁目・八尾市太田九丁目
- 2 調査期間 一九八二年(昭57)二月～一九八三年(昭58)六月
- 3 発掘機関 大阪府教育委員会文化財保護課
- 4 調査担当者 阿部幸一・岩崎二郎
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代中期～一三世紀
- 7 遺跡及び墨書曲物出土遺構の概要

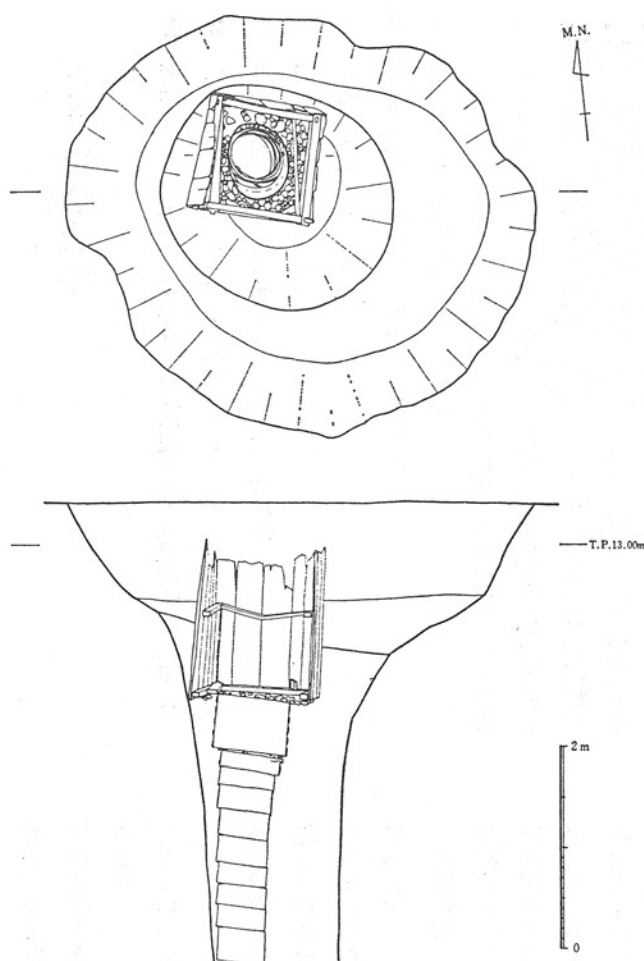


(大阪東南部)

津堂遺跡は藤井寺市の西北端から八尾市域にかけてひろがる標高約一三・五mの水田地帯に立地する。周辺には条里地割がよく残存していたが現在は西名阪道路が遺跡を分断し工場・倉庫等が進出し景観の変化が著しい。遺跡の南東方一帯には段丘地形が発達しその上には旧石器時代から近世・近代に至る多くの遺跡が立地する。中でも応神陵古墳をはじめとする古市古墳

群や、飛鳥時代以降営まれる多くの寺院跡、官衙等の存在はこの地域の重要性を物語る。また段丘の北縁にひろがる沖積低地部も近年の開発に伴う調査で多くの遺跡が明らかになりつつあり、津堂遺跡もそういった低地部の遺跡の一つである。今回の調査地は諸氏の条里復原によると丹北郡九条二里(里の名称は実際は数詞でなく固有名称が用いられたがこの地は不明)の一九・三〇坪にあたる。河内国衙推定地の国府遺跡は東南東三・三kmの地点である。また正確な位置はわからないが付近には会賀牧がおかれ、現在も恵我之荘の地名が残っている。

遺跡は府立藤井寺高校新設工事の事前調査によって発見され、弥生時代から平安時代の遺構・遺物が出土しているが未報告であるため詳細は不明である。今回の調査は民間の倉庫建設に伴うもので、主として古墳時代(五世紀)と平安時代の遺構を検出した。古墳時代の遺構は調査区内を蛇行しながら南から北へ流れる河川跡と、土壇・井戸・溝等がある。遺構は主として河川跡周辺に分布し、遺物は土師器・須恵器の外に製塩土器や漢式土器も少量みられ、河川内には弥生中・後期の土器もわずかに混入している。平安時代(一二世紀後半～一二世紀)の遺構は掘立柱建物約一〇棟、井戸八基、溝・土壇多数がある。諸般の事情でトレンチ調査にとどまったため建物等の員数や配置状態は不明の点が多い。建物と井戸は調査区北半に多く、ピットの集中状態から数カ所の建物群が存在するようであり、



墨書曲物出土の井戸実測図

若干の空閑地において南端部にも井戸・ピット群がある。建物の規模は幅3mのトレンチ内では一間×一間または一間×二間しかわからないが、四〜五間のピット列もあるので大型の建物がある可能性はある。主軸方位はすべて東西・南北に近い。建物群の周辺を区画するような溝あるいは柵列といった施設はみられない。遺物は瓦器・土師器を中心として一世紀末から一二世紀代の限定された時期

のものが多く、他に中国製陶磁器、東播系須恵器鉢等が量は少ないが存在する。

墨書された曲物は調査区北端に近い第一八トレンチ（現代の行政区画では八尾市太田九丁目）の一号井戸の井戸枠として再利用されていたものである。井戸の構造は掘形の中に曲物及び木組みの井戸枠をつくるものである。掘形の上部は径約4m、深さ約一・六mのスリ

鉢状で、その底部の西北に偏した位置からさらに径一・二〜一・五mの円筒状に掘り込んでいく。井戸枠の下部は曲物を重ね、最上段の曲物の周囲には拳大の石を敷き、その上に板と角材を組合せた一辺約一・一mの方形の枠をつくっている。角材で方形の木組みを数段つくり、上部の木組みは四隅の束木で受け、木組みの外に側板をたてならべる形式のもので、木組み部材の加工は精巧で側板の合わせ目には裏板を添えるきわめて丁寧なつくりものである。出土遺物は井戸枠内から瓦器小皿・碗、土師器小皿・台付皿・羽釜、中国製陶磁器、東播系須恵器鉢、鉄斧、銅製金具等があり、井戸枠外の掘形内からは瓦器・土師器の細片が少量出土した。掘形内の遺物は実測可能なものは瓦器碗底部一点の

みで、その形態・手法は墨書にある康和四年（一一〇二）頃のものとして矛盾はない。井戸梓内の瓦器は一二世紀中頃とみられるものであり、東播系鉢は一二世紀中頃と後半とされるもので墨書の年代とは開きがある。

## 8 墨書の釈文・内容

- (1) 「謹解申雜物進上名簿帳事合佰柒拾玖人平將胤絹百足源親方穀二百足藤」  
原宗興縁三百足

1972×249×8 001

- (2) 「謹解申雜物進上名簿帳事合佰柒拾玖人平將胤絹百足親方」  
穀二百足藤

1866×260×8 001

- (3) 「物進上名簿帳事合佰柒拾玖人平將胤絹百足源親方謹解申雜」

1933×273×8 001

- (4) 「康和四年四月廿三日守丸」

1589×221×6 001

(1)・(2)・(3)はそれぞれ四・五・六段目の曲物の外側に墨書されたものである。いずれも曲物の底部が文の右側になり、(3)は曲物の継目をこえて文が続く。従って曲物を解体する前に、左手で曲物の口縁部を保持して書いたものであろう。(1)が最もよく文が残る(2)・(3)は同一の文の一部を記す。(2)は曲物の破損のため文の末尾がわからないが本来は(1)と同一の文であるかもしれない。また(1)・(3)と異なる

り名簿帳の「名」の字の上に「一」状の墨書がみられる。(3)は文のはじまりが曲物の継目と一致せず、文の途中で終わっている。(1)・(3)の筆跡はよく似ており同一人の手になるものと思われる。何故にこのような文が曲物に書かれたかは種々の可能性があるが特定できない。この集落の住人が進上する側であるのか、進上を受ける側であるのかも不明である。いずれにしても古代末から中世初期の南河内における在地有力者層の動きの一端を伝えるものとして注目される。

(4)は八段目の曲物に書かれたもので、筆跡は(1)・(3)と異なり、文の方向も(1)・(3)とは逆で、文の左が曲物の底になる。(1)・(3)が曲物全体を使っているのに対し中央部のみを使い上下に空間がある。(4)と(1)・(3)は文書としては無関係のものと考えられる。この年月日と人名が何を示すかについても断定はできないが、少なくとも井戸の築造年代の上限を示している。井戸内出土遺物の一二世紀中頃と後半という年代観はこの井戸の廃絶時期を示すもので、(1)・(3)の墨書が書かれたのは井戸がつくられたとみられる一二世紀初頭をあまり溯らない時期とみられる。

## 9 関係文献

大阪府教育委員会『大阪府文化財調査概要一九八三年度』(一九八

十中辨物進上名簿帳事合

檢入平竹麻月

百八魚親方東多足鹿

有六翼續三百正

(1)

謹解申能物進上名簿帳事合  
契三百正解石

簿帳事合  
檢入平竹

絹百正親二

(2)

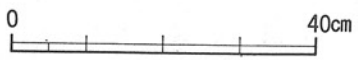
物進上名簿帳事合  
檢入平竹麻月

百八魚親方東多足鹿

(3)

原和四月廿三日守九

(4)



四年)

(付記)

墨書の釈読は奈良国立文化財研究所鬼頭清明氏による。墨書曲物の展開図は曲物の実測図と赤外線写真により合成したもので、写真撮影は阿南辰秀氏、実測及びトレースは館邦典氏による。

(岩崎二郎)

## 長岡京木簡(一) 解説付

向日市教育委員会

向日市内から発掘された木簡は現在一二〇〇点を越えるが、その内四二六点の写真図版と釈文三六二点を収録し、付載として墨書土器八六点の図版と釈文二二八点を収録した。

本書は長岡京遷都千二百年を記念して出版したものである。

図版 B4判 コロタイプ写真印刷 五一葉

総説及び釈文 A5判活版印刷 総頁三二〇頁 定価 未定

有限会社 眞陽社

## 大阪・高宮遺跡 たかみや

- 1 所在地 大阪府寝屋川市大字高宮
- 2 調査期間 一九八三年(昭58)十一月～一九八四年(昭59)三月
- 3 発掘機関 寝屋川市教育委員会
- 4 調査担当者 塩山則之
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 旧石器時代～室町時代
- 7 遺跡及び曲物出土遺構の概要



(大阪東北部)

高宮遺跡は、生駒山系の西側斜面から派生する洪積層の寝屋川市東部丘陵の南端、海拔二八m前後の北東から南西へゆるやかに傾斜した丘陵地形に位置している。この丘陵上には、白鳳時代創建の国指定史跡高宮廃寺跡が所在している。

高宮遺跡は、一九八〇年から四次にわたって調査が進められてきている。その結果、旧石器時代から室町時代までの遺物、遺構を検